

『オノマトピア——擬音語大国につぼん考』 桜井 順 著



岡田 芳郎

おかだ よしろう

1934年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年㈱電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）、「観劇のバイブル」（太陽企画出版）、詩集『散歩』（思潮社）、「世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか」（講談社）など。

日本語への深い愛情

CM音楽作曲家の書いた言語論である。音から言葉を考えると「ことば」として発声して初めて言語は一人前になるような気がする。この本を読んだあとは言葉や文字の世界がそれまでと違いいきいきしたダイナミックなものに感じられてくる。

桜井順は数多くの優れたCM音楽をつくってきた。3000本に及ぶCMは戦後日本が生んだ商業音楽の歴史そのものだ。野坂昭如の歌う「黒の舟唄」「マリリンモンロー・ノーリターン」や杉山登志のCMにつけた音楽などは印象的な仕事として知られる。そして作曲とともに『CM詩集〈毒〉』、小説『日の丸病院』など文筆にも冴えをみせる才人だ。桜井順の文章には実作者のもつ肉体がある。理屈と表現がないまぜになった説得力は実感から生まれてくる。

音楽家だが言葉への好奇心の強さには驚かされる。行間には日本語への深い愛情がにじみでている。この本は広告の言葉を考える者にとって大切な考察に満ちている。

本書は三部構成で、第一部「文学・芸能オノマトピア」は文学者や芸能人が表現したオノマトピアのアンソロジーだ。音楽家の耳が鋭敏に音の感触や喜びや恐ろしさを聞き取る。言葉から音が粒立ってくる。

第二部「社会・風俗オノマトピア」は世の中の表面に浮かぶさまざまな事象をとらえ、オノマトピアを切り口に軽妙

に日本人の言語表現を語る。遊びながら書いているが著者の批判精神が味付けになっている。

第三部「オノマトピアのガクモンの考察」では「オノマトピア成立の条件」「楽器のオノマトピア（口演〈くちだて〉）」などの音楽家らしい深みのある考察がなされている。

以下、便宜上、第三部から紹介しよう。

「第三部 オノマトピアのガクモンの考察」で、著者は、『言葉』は普通考えられているよりはるかに深い意味で『音』であり『肉体』なのだという。「現在『言葉』が持っている『意味』などというものは、われわれの祖先が肉体的に感じとり肉体的に表現したイメージのパターンが永い永い年月の繰り返しの間に抽象化をうけて、ある範囲に定着したものにすぎない」

言葉は意味の伝達や情報の運搬のまゝに音による表現であり、それ自体でなにかを表わしているのだ。効率一点ばりの社会生活で現代人は言葉のなかに原初的なイメージを感じとる能力をすっかりすり減らしてしまっていると著者は指摘する。それが言語生活を貧しくさせているという。

念仏や子守唄、ポップワードやナンセンスワードの影響力の根源を言葉そのものの根源であるオノマトピア（擬音・擬態語）の周辺にさぐるというのがこの本の狙いの一つだ。

歴史を辿るとまず奈良時代、文献上、日本最古のオノマトピアは「古事記」の「コヲロコヲロ」という音だという。

イザナギ、イザナミの両神がアメノヌホコで天地の混沌をかきまわすこの音は3シラブルで表現され、2シラブルの表現に慣れている現代人には耳慣れず、神主の祝詞や謡曲を連想させる。「古事記」には、大きな魚を釣り上げる重みで竿が「トヲヲトヲヲ」になる、とか、「出雲風土記」には力自慢のヤツカミズオミツノが国に綱をかけて引っ張ると「モノロモノロ」と国がひきよせられるというくだりがある。

たしかにこれらのオノマトピアには意味以上に肉体的に感得できるイメージがある。

平安時代、清少納言の「枕草子」は、「サラサラと鳴らしたるもいとにくし」「扇フタフタとつかひ」「鳥のいとちかくカカと鳴くに」などとオノマトピアを使っている。紫式部の「紫式部日記」も「渡殿の橋のドロドロと踏みならさるさへぞ……」と擬音語を用いている。この時代はオノマトピアにも公卿文化の繊細な表現が感じられる。

鎌倉時代になると武家の文化となり、その代表文学に「平家物語」がある。著者は合戦場面のオノマトピアによる描写のみごとさを紹介している。

「ムズと組んでドウと落つ」「ヨッピイてヒョウと放つ」「ヒョウズバと射て」「（刀が）目貫の元よりチョウと折れクツと抜けて河へザンプと入りにけり」など激しい動きがオノマトピアによって視覚的に鮮やかに表わされている。擬音、促音などが増加したのは漢籍や仏典の影響だと指摘する。

オノマトピアは時代を語っている。

室町時代は、日本語の世界でも大きな変化の時期で「近世」のはじまりともいえる。下克上、東国語と京都語文化の融合が起き、「狂言」では庶民の言葉が語られる。濁音、強勢のための接頭語も加わり、オノマトペが多彩になってくる。

著者は、『狂言』のオノマトペの面白さはまず第一にそれがセリフの中にト書風にはさまれるところにある。音楽や効果音を口演（くちだて）でやってしまう」と述べ、「山伏は必ずほら貝を／ボロオン ボロオン／と吹き、尺八なら／トラアロリ リイリイ トリアロ ラアラロ フウ／三味線は／ツレテンツレテン テレテレン／という工合であり、引っ込みの笛のきまりのパターンとして／ヒヤアリヒヤアリ ホッパイヒャロヒイ／がある」と記している。音楽も効果音も登場人物がやってしまうこのおかしさが諷刺に必要な軽さと観客とのなれあいムードを醸すのに役立っていると説明している。

長い江戸時代の中から、三つの材料を抽出する。まず近松門左衛門は、「全体がすでに一つの音の流れである文章をさらに官能的にするための薬としてオノマトペを使っている」という。例えば、「上りやスナスナ下りやチョコチョコ／心の内はムシャクシャとヤミラミツチャの皮袋／えぐりクリクリ目もクルメキ／大ひき出しの錠明けて／箆筒をヒラリと 飛八丈」のように七五のリズムを基調にしてオノマトペや自由な造語、掛け言葉などで微妙なシンコペーションをつくりだす、という著者の説明は作曲家ならではの捉え方だ。

元禄初めごろから流行った「冠りづけ」は、川柳の変種だ。テーマとして出された頭五文字に七・五をつけて完成する。このテーマの五文字がオノマトペで出されていることが多く、江戸庶民の擬音感覚がよく分かるのだ。

ヌッペリと そりゃ方便といひぬける
ヌッペリと 草紙ぬらした昼あがり

ゾクゾクと 誰あれも知らぬ下駄の音
ゾクゾクと 惚れて居るのに口説か
るる
シットリと ほれた男の背をながす
シットリと 母は上手に問い落す
チンマリと 合羽たんだ旅役者
チンマリと 人別にない初難

これらのこまかいニュアンスに日本人特有の心理的擬音擬態語の表現がある。



滑稽本には日常生活そのものを表す写実としてのオノマトペが使われる。式亭三馬の「浮世風呂」はその洪水だ。トントン（壁をたたく） ギャアギャア（と泣く） フフフン（鼻うた） ギロギロ（にらむ） ムグムグ（口を） ヤッシッシヤッシッシ（湯をかきまわす） ドッピドッピ（と騒ぐ） ニョロオリニョロオリ（うなぎ） テコテコテンテンツンポンポン（三味線） ザップリ（湯につかる） ここには心理的表現はなく聴覚が即物的に表されている。

著者は歴史的にオノマトペの流れを辿り、いくつかの特徴を記す。

まず、言葉の響きに対しての潔癖さががだいに崩れてきていること。次に、濁音とともに漢語の撥音、拗音、促音、延音などが言葉にダイナミックさを与え、動作とシンクロする言葉が生まれたこと。さらに、言葉はつねに社会階級の上層によって固定化されようとし、オノマトペはいつも蔑視され

てきたことを語る。

鎌倉期以降、江戸時代でもオノマトペをそのまま使った文章は品位が低いとされ、漢字を当てるようになったという記述は鋭い。キラリが閃々、ニコリが莞爾、ハッシが発矢、ソットが卒度、サットが颯と、グズグズが愚図愚図と表記される。だがオノマトペはゲリラのような生命力を持っていて一種の社会バランサーの機能を果たすのだと著者はいう。

擬音語と理想郷

この本のまえがきで、「オノマトピア」とは「オノマトペ=擬音語」と「ユートピア=理想郷」を、多分に反語的意味合いをこめて合成した著者の勝手な造語だと記している。

ニッポンは擬音語大国であり、豊かなオノマトペがなかったら日本語の表現能力は五割方落ちるといふ。CMコピーの「ピッカピッカの、一年生」は、オノマトペでなければ表現できない。そして意味よりも響きを重視する語呂合わせ、ナンセンスの言葉遊びが広告に氾濫する一方、なんでもひと言の単語で片付ける失語症的退行現象も顕著に表れているのが現状だ。

こうした状況は、効率追求で生命力をすり減らされた「コトバ」の、ふるさとへのUターン現象すなわちオノマトペによる回復の希求ではなからうかという。

本書は論理的な話の進行よりセンスとヒントを楽しむ評論・エッセイだ。面白く読みながら学ぶものは大きい。言葉を音にする仕事、しかもCMという短くアテンションを必要とする音楽をつくる仕事からこの本は生まれた。実体験の重みが記述に肉体性を与えている。

書名：オノマトピア
—擬音語大国にっぽん考
著者：桜井順
出版年：1986年
出版社：電通（文庫版 岩波書店）
広告図書館分類番号：911-SAK
I S B N : 978-4-00-602170-2